武家名目抄稿

居所部附録三

三

和書門
類
二五二〇六號
七七函
一一架
四五六 四四九冊

内閣文庫
和書
類
二五二〇六號
四五六冊
一一三函
一一架

内閣文庫
番號 和 25206
冊數 457(173)
函號 153 275

国立公文書館
National Archives of Japan

武家名目抄稿第三冊

居所部附録三目録

移宅
土木之事
護摩堂
懺法堂
紫宸殿
公卿間　又名天上間

国立公文書館
National Archives of Japan

天上間
天鏡間
泉殿
看雲亭
木九
西ノ九
二ノ九
三ノ九

出九
城
木城
根城
材ノ城
附城
向城
館城

子城
外城
端城
ワヲノ城
付候城
支配城
城郭
惣搦

ワトハ曲輪
外曲輪
町搦

国立公文書館
National Archives of Japan

武家名目抄稿第三冊

居所部附録三

移宅

土木之事

護摩堂

懺法堂

紫宸殿

公卿間　又名天上間

国立公文書館
National Archives of Japan

天上間
天鏡間
泉殿
看雪亭
臥雲日件録云文安五年八月十九日寂一
掠投来留而宿中略予又聞鹿苑院殿於此移
宅之支曰創基恐在于泉州合戦之前一両
年欽初命諸大名之士役于土木獨大内義

弘曰吾士以弓矢為業而已不可役于土木
即義弘深逆鈞旨之盭觴也経営未畢時令
考其費則二十八万貫也然則至于畢功則
殆百万貫乎隆構傑閣登棟雕梁東西南北
基布星羅如自天降如從地涌故法雲寺殿
雪溪居士咨鹿苑院殿曰此新第不可以換
西方極楽也天下于今為口實焉今時西南
有護摩堂東有鐵法堂今為等持寺宗鏡堂

者是也懺法堂東有紫宸殿今為南禪院者
是也宸殿東有公卿間又謂之天上間今為
建仁寺丈者是也舍利殿北有天鏡閣復道
與舍利殿相通往來者似歩虛閣北有泉殿
二今則廢矣閣曾為南禪寺丈閣而去歳回
禄為灰燼可惜又會處東北山有看雲亭内
安七佛藥師像二今在法水院耳亭則元馬
云々

木九

義輪軍記云城の大將長野右近進業盤廊
外に責破らるき本丸小引籠ゆゑ敵しく防
ゆり
秀頼事記云秀頼公御出馬有ト云處ニ
速水甲斐守御前ニ歩ヲ味方敗軍ト見ヘ
候御出陣有タレハトテ大軍ノ崩カくり
大敵ヲ受テ叶ヘシ氏不存只御馬ヲ入テ

レ御本丸計ヲ御堅有テ時至テハ御腹ヲ
可被召ト申シケレハ此御者ト一同シテ
千畳敷ヘ入給ヒケリ
又云伏見在番本丸鳥井彦右衛門西丸内
藤弥右衛門門島中一郎大手門松平主殿
西ノ丸
二ノ丸
三ノ丸

大友無礼ニ云（生の松原合戦条）林蓋参ら大ハらの
者ハ色はとりく返り和泉守也一ヲ町迄
立る雪可なのく色ずり槍鉄砲のく林蓋
迄中にとりかこみ如へハ御ふ和泉守うの
く林蓋ハ討捕ス成ル高く後陣結ス近討
付迎ハしく方祖の城二三の丸まて皆色入
焼立勝ときを一所ニ皆く生乃松原ハ引取云と
播州依用軍記云（政範箕城条）此城ト申ス八東

向ニ大堀一重有テ橋ヲ渡シ橋ノ南北ニ
矢倉有追手小山崎ト云ヒ南方ニ丸谷
口ヲテノ真篭嶽ト云フ大型樋嚴渭切岑
ニテ城際エ十タレタリ
籾井日記云亀山ノ城ヲ乗返シ東方ヲ一
面ニトヒノヘ候コト所要ニ候トテ遠江
守殿ヲ大將トシテ籾井越中守教業赤井
悪右衛門尉同名次郎左衛門景光江田兵
庫頭荒木山城守酒井作渡等ノ宗徒ノ人
々押寄候テ息ヲモ続セスモミ立々々々
攻テ候昭中明智モコウヘ兼テ討テ出候処
ヲ喻止候テ大方ニ討取テ候信長カ方ヘ
注進ヲ急ニ致スニヨリテ帝都ヲコヘテ
後詰ヲ申付テ候ヲコレヲモ夥敷討取テ
候其後急ニ強攻ヲシテ三ノ丸ヲモ出丸
ヲモ乗取テ候二ノ丸モ半ハノリ取其勢

ヒニ本九ヶ条付ントスルニ信長勢ヨ
リハ者カ文焙ヲフラレテ抱テ候
三 武蔵叢話云源信逝去の時云郎景虎と景
勝と兄弟家督相論し景虎ハ春日山の城
二の丸ヨリ居られし小城より景勝鉄炮
打掛る故景虎為ま一里半斗程の所鉢
城へ退く是城主の笹領上杉憲政
小田原侍従氏康の城へ親丹後守則坂

戸の城へ人数を入て春日山北城と並為
る愛宕山城を入れ氏上ハ春日山本城
より高ケれハ見下られて不利ハ京勝叶ハ
ヶ て姉聟上條の城を上杉弾正忠春正
竜宮山ヨリ立くこ云しと
玉露叢云慶長十九年九月三日二三九二
於テ御能五番仰せ付うル
又云元和元年正月十二日大御所岡崎ニ

御留滞幕下ヨリ御使トシテ依久間河内
守安藤治右衛門参上ス則チ御前ヘ召出
サレ大坂ノ城割ノ儀御尋アリ申上テ云
リニノ丸ノ堀存ノ外深ク幅廣ノ土手ヲ
引落ストイヘトモ三ケ一モ足ラスニノ丸
千貫櫓ヲ始メ殆ト家屋其外西ノ丸ニ
修理大夫カ家何モ引崩シ右ノ堀ヲ埋ム
慶長見聞記云大坂西ノ丸ヘ御移被成候

ヘト申増田右衛門長束大蔵ナト取持ニ
テ西ノ丸ニ大廣間天守ヲ建テ進上被申
云々
當代記云慶長十八年三月五日駿府於ニ三
ノ丸常陸立能ニ給五番常陸宮弱ノ能
未ノ祝言觀世左夫ハ慶長十五年庚戌蒙
勅當去年召直駿府ニ祗候
又云慶長十九年四月十四十五両日駿府

於三丸能アリ今春八郎雖相煩日ニ二番
ツヽ仕其外ハ進法印木頼寺衆也

出丸

関八州古戦録云南方勢金山館林城責条由良ノ出丸
ヽ八島山出雲入道同主膳正金谷因幡守
築井伊織金井田傳吉大木内匠助佐岡次
郎兵衛一守リ居ケル力其中ニ金井田傳
吉今日ノ軍ニ手ニ合スンハ後日ノ残念
是ニ過シト家人共引連レ出丸ヲ出テ長
手口エ押行ケル

籾井日記云合戦条野木城秀吉公ハコウヘヲ
若大将ニテ候ヘハ縫殿ノヲ兼落シテ生
取ニセヨ手延ヒニ致シ候ハヽ羽柴カ後
詰モアルヘキソ只急ケヽトアレハ揉
立テ強攻ニ致サレテ候程ニ山名殿ノ手
ヨリ一番ニ西ノ矢倉ヲ乗取テ候久下越

後八出。九ヲ乗取ヲ候

城

日本書紀ノ垂仁天皇紀云命上毛野君遠祖
八綱田令擊狹穗彦時狹穗彦興師距之忽
積稲作城。其堅不可破此謂稲城也
古事記伊久米伊理毗古伊佐知命記云天
皇乃興軍擊沙本毗古王之時其王作稲城。
以待戰

續日本紀云神護景雲二年二月癸卯筑前
國怡土城成。
又云宝亀六年十月壬戌前右大臣正二位
勲二等吉備朝臣真備右衛士督尉下道
朝臣国勝之子也中略勝宝四年為入唐副使
迴日授正四位下拜大宰大貳建議創作筑
前国怡土城。宝字七年功夫略畢遷造東大
寺長官

又云宝亀六年十一月己巳遣使於陸奥国
宣詔夷俘等忽叛逆心侵桃生城鎮守将軍
大伴宿弥駿河麻呂等奉承朝妄不顧身命
討治殺賊懐柔帰服
乗家物語云そのせいはくにの
へもりのうらはきそハよくせきあるうら
のこうりをきりてしゆをとりてそのせいこゝよ
きかてをとりのうらはちんをとる

太平記云楠ハ元来勇氣智謀相兼タル者
ナレハ城ヲ持ヘケル始用水ノ便ヲシル心
ニ五所ノ秘水トテ峯通ル山伏ノ秘ケ汲
水此峯ニ有テ漏ル事一夜ニ五斛斗也比
水イカナル旱ニモヒル事ナケレハ如敵
人ノ口中ヲ漏サン事相違アルマシケレ
トモ合戦ノ最中ハ大矢ヲ消シ為又喉ノ
乾ク事繁ケレハ此水計ニテハ不足ナル

ヘシトテ大十ル木ヲ以テ水船ヲ二三百
打セテ水ヲ湛置タリ云々
又云（金崎城攻条）使々木塩治判官高貞ハ出雲
伯耆ノ勢三千餘騎ヲ率シ兵船五百余艘
ニ取乗テ海上ヨリソ向ケル其勢都合六
百余騎山ニハ役所ヲ作雙ヘ海ニハ舟筏
ヲ組テ城ノ四方ヲ圍ヲル事漏透間モ無
リケリ

新田山良家傳記云成繁公ハ代ハ武蔵
ハ者ハ清代京新家ハル数多有之其外
一代ハ武蔵ハ新田ハ城中ハ花ハ入
ハ船ヲ寄セ事ハ城ヲ下ハ
先利家記云元清家ヲ相続有テ徳田ト
名乗セ給ヒ備中國猿懸ノ城ニヲシヽヽ
ケルカ余リ高山ニテ不自由ナリトテ天
正十一年ニ同國ノ内中山ト云シ山ヲ城

搦サセ給ヒ居住サセラレシ

甲陽軍鑑云勘助承ル中ニ為ル我ラ城ヲ取

シ縄ヲ張ハ乗相傳シ関東西ヲ方四道

観ル事ヲ為ル用ヲ拵ヘ[illegible]

ひきしき事ヲ[illegible]ハ[illegible]

と為ル為ル者ヲ[illegible]

謙信家記云輝虎公越中発軍ス輝虎公越中加

賀飛騨ヲ心カケ給ヒテ一年前ヨリ心安

侍ヲ三ケ国ヘ二人宛鮭ノ商人ニ持ヘ国

ノ険難或ハ輝虎ニ志アラン侍ノ方ヘ策

略ノ為ニ指越給フ所ニ六人ノ侍ヒ三ケ

国ヲ廻リアラエル城ノ繪図或ハ山川沼

フケ川近ノ甲乙道筋迄ヲ繪図ニナシ来

リ云々

簑輪軍記云簑輪落城条同如月十五日夜深ル

新城ノ城中ヘ押寄ケ[illegible]則中城之より上

れの宮殿ヲ焼ク至レリ然也鎌倉天地ヲ動し
強弓弦止事嘱主家亡ホ多中ニ中ラハ八中
時当て大軍ヲのけ合戦ヲ以とくとル中と
叶ふ中ル此ヲ事ハ其ヲ信玄ホウ
ちゝ也ちゝ後ヲ志代の面目ヲ考ヘル
甲州ヲ義ヲ
奥羽永慶軍記ヲ云ク伊達成実今ハ下野国宇都
宮モ幕下ニリ属ヒケル其故ハ通ニシ天

文十九年七月十四日宇都宮前ノ尚綱行
年二十八歳同国喜連川五月女坂ノ上ニ
シテ討死ス因茲敵壬生中務大輔宇都宮
ヲ乗取居城せり尚綱カ嫡男伊勢寿丸希
有ニシテ遁死真岡ニ蟄居シイカニモシ
テ父ノ吊合戦ヲモ、壬生ヲ討テ宇都宮
ヘ立帰ントテ憤リ日月ヲ送リケルカ
一方ノ力ニハ及難ク立越依行ヲ頼

ム義昭是ヲ聞給ヒテ伊勢壽丸方年ノ身
ニシテ父ノ敵ヲ討ントト徹骨隨思フ事コ
リ哀ナレ
又云自須田美濃守方矢部保原所ヘ遣飛脚奈須賀川落城時
ヽヽ討殘サレタル兵三十騎ヲ率テ引退
ケハ向ヨリ前田沢東ルニ行違タリ美濃
是ヲ見テ御遣ハ何地ヘ歸ルソ城ニハ火
懸リタリ急キ共ニ落テレヨト云ハ前田

沢聞テ二階堂ノ巻物御床ニアリイカニ
シタマフト云々
見聞雜錄云大將ハ人形日吉ヲ憑改ムル
ハ於后相ゝ如城雖ト籠城堅固ニ防云
ク
三
武藏叢話云御田城ニ助信忠郷ハ仁科五
郎信盛ガ籠リ如ク遠の城ヘ攻結一時ニ攻
元亨中略大度間ハ七日ニ十加賀也ヘ

受給り御家苅自此攻向く事可
又云相秀吉ゟの出人数七百八拾人
元来くたゝ馬介ハ安土城ゟ取来る
御国行ハ方刀二字国俊の刀葉林藤四郎
此脇差ハ家の唐御乙山前の差値ハ
此水さし盃堂裏添ゟ坂唐織の宿衣ハ包
女の天の紳ハて結付敵を此敵者ゟ
持如大吉ハ天下ハ天下此重義也減し

ハ人事委敷ハ存見録至ゟ
可ゟ

松原自休手録云家上山形ノ城出羽守在
城又景勝老臣直江山城守在米沢會津山形廿里
米沢山形隔十四里直江為大将春日右門五百騎上ノ
主水七百騎大関弥七郎後号水原常陸為軍鑑九月
十三日山形ハ攻取旗屋寨絶山形四里城主江
口五兵衛自害又

三河記云秀次白取山松平伊豆
さきしく城を出て城を出て
送りまりしく城さきの郡
松平記云信玄至後二股城へ押寄
城の中根平太郎大將にて
青木又四郎松平善右衛門籠る
別れと敵の大勢を事とも
為し寄て攻しに城方
り後詰の勢出張し時分二股の城北水の
自然とくられて籠城雖十城を
水ハ信玄宮信濃芦田の野に城籠る

水城

和井日記云宗高卿於越前国横死条久基ハ代々攝州
ノ守護職ナレトモ池田勝政ト代々国
取合ヤリテ久基ノ旗下水領ノ者トモ年
々ヲムキ敵ト十ヶ候ニ一勢ニ次第ニ

弱少ナリ候六能瀬ヲ水城トシテ国中ノ
敵ヲ窺ハレ候

根城

粉井日記云永享貞八上工敵ハ是非ニ
遺後詰勢条
八上表ニ仕寄候テ屋形ノ根城ヲ取切候
テ所々ヲ押ヘ西口ト搦合テ勝負スヘキ
赴キニテ候

府ノ城

船田記云四月十一日午後利綱卒村山利
重与兄利安従陣於正法寺中略亦従正法寺
南北鴻滝方一寺如両寺人皆喚吾軍為北
正法寺喚敵軍西南正法寺々与府城隣築
射臺者南北併二十有二其中聳然高者惟
七云々

増補家忠日記云天正十年八月廿六日大
神君松平主殿助家忠ニ命シテ新府ノ向

城ヲ守ラシヲ給フ

附城

大友奥摩祀云安岐口人逆心の条きゝ申とゝ郷人あ
らかしめ親貫に一味すし逆心の志をり
まれきよりしゝ申あるを如来を先のい
きゝをりをけんために郷中の者申さよ
て安岐の切寄に付城を搆へ居之
候武家国清内義家傳云永禄十年三月十吾

半蔵吉田長沢三ケ和の城居す中略 田附吉
田城の向て付城を搆へ宗徒の勇士を籠さ
せ給ふ先〻又吉の砦に八内義三左衛門信成
石川日向守家勝殿八郎等也粕塚の寨
に八大久保七郎右衛門忠世小栗仁右衛門戸田
国情等其外器量の崎を智の掌智くに相法て
板屋の境内ゝ拵楯搭楯付寄こゝ攻戦
ふ平平攻みまつ〻暫く敵の板塀を乃斗へ

とて石川内蔵吉人小川馬廻り五百騎斗
指副られ出し給ふ云々
武徳叢話云天正十五年三月秀吉公薩摩
へ出陣給ふ津久根城を攻落され大
和大納言秀長近江中納言秀次八万の軍勢
豫州弘内蒙久兵衛二方案内として豊後府内
より日向の縣へ掛り薩摩
迄乗入る城賊部其城攻落す
城五十一ヶ所内五ヶ所内を越て根白と
和田兵出羽へ立籠へ玄部善祥坊鎖綱木下平
左衛門貞基亀井新十郎慶政頃原隠岐守光
秋福原右馬介直高一万五千余人陣を時津
出張の口を押へ中略根白坂城八時津の軍
兵雲霞のごとく取囲み強地矢弾の音関の
聲相交く天地も響く斗也
松平記云彩孫元年三月尾州科野城へ後

何より松平郡司大輔より三百人ヲ以テ義又
笠寺城ヲ後何方面ヲ伺ヒ
改尾張国ヲ浅井小四郎四百余人ヲ以テ義元
ヲ小尾州高科野ノ城ヲ付ル城ヲ付ル日ヲ数
ヘ云ヘ
當代記云慶長十九年十一月十八日両御
所天王寺茶磨山ヘ御登大坂ノ城遠見ヲ
給ヒ付城ヲ有番請被指置軍兵止通路云
々
水野勝成記云平後切り之の志き事と中
和ヘ權現様ハ偏ヲ成庫城ヲ区ル云成れ
向城
野田福嶋合戦記云信長ハ天王寺ヨリ中
嶋天満森ヘ陣替有リ天神ノ拝殿モ會所
モ今度焼ケレハ森ノ中ニ陣取先陣ハ野
田ノ北海老江堤田中ニ陣屋ヲカケラレ

ヨリ八日ニ向口城ノ鍬初アリ

一 會津四家合考云政宗櫨原峠陣留之事付盛国隠謀条 政宗

萱峠ヨリ引返サシテ後原田等カ田付ノ

合戦ニ討負テ敵方ノ業カ者弾正サヘ長

井ヘ落来ル由告タリケレハ政宗業ニ相

違セラレ備ハ早會津方ニ隠謀ノ同志モ

洲又是程迄思立タル事ノ本意ナサヨト

テ徒ニ櫨原峠ニ滞留ヽ向城ヲ築テ昏夜

漂十カリケル云々

館城

三 三蘆叢話云天正六年三月より翌年百迄

城後国中加ツ小城ヽ築初止事ハ城戸

北城ハ上杉弥五郎殿居城の樣ニ

八景虎方より北大事ニシテ毎枝鉸城ヨリ

切出丹後守忍ヘテ沖高小来り和田小八

鉸の城（傳ヲ中略弥五郎家老名義ヲ十郎蓮

此と少所を乗込度如小鈴の城乃三昧ハ
て終茶葉礼有て大葉の煙り四方皆と色
を遠見者ハ而〳〵五色色きく掛て金ハ信
一人鈴城の方より来る鈴の三昧ハて葉
礼有ハ何者ハ知ハ中と問祥信孫ハ信姫
後ハ飯作朝ハ頃中ハ此れ今日死去ハく其
者ハ此ハ知ハ我ハ此者後ハ寄ハ
仕迎ハ者〳〵押りハと強て ハ通ハ

子城

豊臣家譜云秀吉発二大坂一赴二大山一其兵十二
万五千余也既到二大山一卒諸士到二樂田羽黒
邊一對二小牧山一陣二子城一其二童堀砦則日根
野備中守弘就舎弟弥次右衛門其兵二千
云々

外城

家長手記云大永二年五月ハ地の旗行越

前田の方ニ人ハ居きく申る山を右御城ハ
ハ、、小枝の中ニ御かゝりて掛川泰能寺
に近百ニの比普請完中外城のめくり弓七百
間城をかり土居をつきあ申ハ本城と相成
しこの地岩山ゝ多ものゝ只後也つきの
けあり上ハ山つゝし

端城

播州佐用軍記云政範箕城条　秀吉郷ハ佐用上
月より免角ノ返事無リケレハ不審ニ思
召彼表へ物見ノ軽騎諜士ヲ遣テ見聞ス
ヘシトテ手分シテコソ遣ケル件ノ物見
翌日所ニヨリ馳帰テ申ケルハ上月ハ箕
城ニ疑所不候先近郷之端城共迄ノ聞退
大川筋ノ北方ニハ四面々ヲ高揚タリ

ツヨリ城

志方羽紙云ハ方ハ入ノ〆きめ市迄さのと

八ツ可てたゝ[illegible]き[illegible]そ[illegible]二三の本戸を[illegible]
[illegible]見[illegible]法めの城[illegible]
有候城

見聞雜錄云ク時ニ方家ハ日代ニ大將ニ
和田伊賀守信長ハ[illegible]中ハ当城要害ニ
山城ヲ中使ヲ求ル城ニ居城觀音寺ノ
城の年候城ヲ云存迎江國中ニ強ク引大
力ニ[illegible]ル志ニ迎ヲ中諸城角ヲ[illegible]ハ籠

城シテ使ヲ求又子の龍角ヲ觀音寺の城
ヲ取ヲ中時ニ後法ヲ[illegible]ヲ法立ル
ヲ以テ中ニ一時責ル[illegible]ハ中ニ義兼ヲ中
ヲ

支配城

松原自休手錄云信玄ト家康和睦ニ少家
康懸川ノ者制法入置石川日向ヲ五百余
騎ニテ金屋近辺ヲ廻見又山縣三郎兵衛

八三千余騎ニテ遠州信玄支配ノ城々往
来シテ行逢家康卿和睦ノ上八山縣孫禮
陪臣ナレハ家康早禮恨之手喧嘩ニシテ
切入供奉ノ輩

城郭

百練抄云寛喜二年七月十六日園城寺南
院衆徒与中北院住侶各搆城郭争雌雄
新式目追加云城郭事次岩門并宰府搆城
郭之条為九州官軍可得其搆云々早為領
主等之沙汰可致其搆云々
吉野拾遺云刑部卿親朝ヘ越前より以
呼寄てものかたり小越前のくにの内たち花郷の山
八幡のくそりこちて城郭のしかるへきとこ
ろ所々にあり云々
太平記云俊基城系彼俊基ハ累葉ノ儒業ヲ
継テ才学優長成シカハ顕職ニ召仕レテ

官蘭ニ至リ職々事ヲ司レリ然ル間出仕
事繁ク籌策ニ隙無リケレハ何ニモシテ
蟄籠居シテ謀叛ノ計畧ヲ回サントト思ケ
ル中略俊基大ニ恥タル氣色ニテ面ヲ赤メ
テ退出ス夫ヨリ恥辱ニ逢篭居スト披露
シテ半年計出仕ヲ止ム卧ノ祝ニ身ヲ易
テ大和河内ニ行テ城郭ニ成ヲヘキ處々
々ヲ見置東國西國ニ下テ國ノ風俗人ノ
分限ヲソ窺見ラレケル

太平記云西國蜂起官軍進發条 将軍方ニ無志モ皆
順ヒ不靡云事ナシ處々ノ城郭國々ノ蜂
起震ヒ京都ヘ聞ヘケレハ先東國ヲ敵ニ
成テハ叶ハシトテ北畠源中納言顯家卿
ヲ鎮守府ノ将軍ニナシテ奥州ヘ下サル
云々

賀越闘諍記云公方様越州御下向之条 爰ニ松永弾正

ト云者有リ木八無レ名者ナリシカ三好ニ
随逐ニシテ大和山城ノ守護職ニ成奈良
ノ多門山ヲ城塁ニカマエテ南都京都ノ
成敗ヲ司リケリ

惣搦

天正事録云御花見ノ次第御催駕シキ様
躰也中略惣搦ニ柵ヲ幾重モ結路次通ニ堺
ヲ結群集リ支ナル故惣搦ヨリ町ヘ御奉
行人増田右衛門尉初トシテ被仰付
増補家忠日記云慶長五年八月廿九日大
神君羽柴美作守親良ニ御書ヲ玉ハル態
申候中略廿三日岐阜惣搦ヲ破則時ニ条崩
候処ニ三郎ハ三左衛門好ミヲ以テ種々
懇望候間自年相助候事云々
玉露叢云慶長十九年十月十一日板倉伊
賀守ヨリシテ飛脚到来ス注進シテ云リ

大坂表ノ躰弥篭城ノ支度ト相見一申候
其趣ハ金銀ヲ沢山ニ取出シ大坂近邊ノ
八木ヲ買コミ武具馬具以下ヲ城内ヘ入
置想構ニ壁ヲ付番匠ヲ数百人招キヨセ
櫓并篭ノ支度昼夜怠ラスト云々

コトハ曲輪

續武家閑談云大須頃五郎左衛門ハ其ト
も曲輪ヘ為ヲ以城ヘ入ル其中ハ中ニ石

屋敷ハ敵引ヲ以ヲ見後城ヲ見ヲ其城
廻りかさく堀塀ヲ付少ハ城中ニ有ル所
ヨリ切くヲ切ハヘシも塀さくのきりかく皆
計ヲ中ハ

外曲輪

奥羽永慶軍記云 櫓原夜討条 遠藤カ日来ノ捉
ヽ目付ノ者敵寄ルヲ見ハ櫓番ニ告其後
本丸ニ来レ櫓ノ者聞ヤ否ヤ見ヲ吹ヘシ

真者ヲ聞傳ヘニ五箇所ノ櫓貝ヲ吹ヘシ
櫓原中貝ノ音ニテ裝束セヨ太鼓ノ音ニ
テ約束ノ持口ヲ固メヨト相定シ事ナレ
ハ夜中トハイヘトモ何カハ苅シモ可驚
弓鉄炮長柄ノ者敵ノ未寄間ニ外曲輪ニ
押出備ヲヒシト立テ待懸タリ
家忠日記抄云天正六年三月九日豫州四
国城ヘ御外曲輪迄破リ多前ヘ敵二人討死
ス

町搦

奥羽永慶軍記云秋田郡阿仁比内一揆蜂起条敵ハ年来
ノ業内者ニテ大勢ナリ味方ハ不案内ニ
テ小勢タリ良モスレハ町搦破ラルヘウ
ソ見ヘニケル

武家名目抄稿第三冊

明治十六年四月

同年同月十五日

同月十九日以四稿逐一校加朱了　末

明治十七年十二月

日四稿校正　小野由久

再校並書　日下部利博

書並校正　木村哲三郎（木村）

圖書寮文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan